

---

# 私の正体\*° マーメイド° °\*

peach-pit

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の正体\* . マーメイド。 \*

### 【著者名】

NZマーク

【作者名】  
peach-pit

### 【あらすじ】

マーメイドの三ヶ野原海季。<sup>みかのはらかいみり</sup> 16歳になり、人間として陸で生活を始める。朝、海で崎本裕樹さきもとゆきに出会う。海季は裕樹に一目惚れ。だけど海季はマーメイドなのにどうしする?!

## 彼との出会い

私は海の底に住んでこまるマーメイド

ピンク色で珍しいマーメイド。

16歳になつた私はこれから陸で人間の姿で生活することが出来る。

「それじゃあお母様！行つてきまஆ

「いつてらっしゃい。あ、そうだ！」

お母様は私に綺麗なネックレスをくれた。

「貝殻だあ。可愛い」

「それはお守り」

「ありがとお！」

私は陸へと向かい泳いだ。

私の名前は三ヶ野原海季。  
みかのはらひみち

ガバッ

海上に着いた。

私は浜に出た。

ヒレを乾かすと人間の足になる。

「おっしゃあ！家をみつけなきやねえー・・・。あつた！」

お母様がひそかに用意してくれた結構可愛い家が私の家だ。

次の日の朝、

私は海が好きなので浜に出た。

「うへん！ やつぱり海ってきもひい」

すると波の近くに男の人気がいた。

「あのお・・・？何してるんですかあ？？」

その人は振り向いた。

・・・結構かっこいい

「ン？ 海みてんだ」

「どして？」

「俺海見ると落ち着くんだ」

「私も！ 私も海大好きです」

私達は海が好きという共通点で仲良くなつた。

「やつべー！ 遅刻する。じゃなー！」

「あ・・・。さよなら」

・・・ちょっとびりガツカリ。  
また会えるといいな。

私は弥生高校に転入した。

「三ヶ野原海李です！」

「じゃあ三ヶ野原さんはあそこの席ね」

私は先生に指定された席に座った。

「よつ」

隣には今朝会った男の人がいた。

「あ。さつきの・・・」

「俺は崎本裕樹。ようじくわ」

裕樹君がニコッと笑った。

ドッキン

私は胸が高鳴った。

惚れ・・・ちゃつた?

「なあ、海季<sup>うみす</sup>って呼んでいいか?」

「うん！」

「俺のことでも裕樹<sup>ゆうき</sup>って呼んでいいから」「分かった」

帰り、

「海李<sup>うみり</sup>！一緒に帰るーぜー！」

「う・・・うん」

私は裕樹君に声をかけられ、一緒に帰ることになった。

「海李ん家つてどーなんだ?」

「海の近くだよ」

「家族は?」

「一人暮らしだよ」

「お。きぐうだなー俺も一人暮らし」

「共通点多いね」

「ホントだな」

裕樹君はアハハッと笑った。

可愛い笑顔だなあ・・・。

いつのまにか家の前に着いていた。

「あーココ私ン家だよ。じゃあバイバイ  
「おーココか。・・・じやな」

私達は手を振つて別れた。

・・・ひざみ。

私、ゆき 裕樹君に一田惚れしちやつたあ・・・。

私のメールアドレスがこよおーーー！

## 友達に聞いた眞実

「フルフルフル

私はある所に電話をかけた。

「・・・はい？」

「あ。海季<sup>うみり</sup>だよ」

「海季<sup>うみり</sup>?！」

そり、私は友達の叶佳<sup>きようか</sup>に電話したのだ。

「お久だねえ！あれ・・・。海季<sup>うみり</sup>陸にいるのにビーチで海と繋がるの？」

「ン？この家お母様が用意してくれたからお母様が色々してくれてるんだよ」

「へえーお母さん<sup>おやぢ</sup>に感謝 感謝」

「こんな」と話してゐ場合じやないよ。

本題を出さなきゃー！

「・・・叶佳<sup>きようか</sup>」

「ン？」

「マーイドだつてバレたらどうなるの？」

「人間に？」

「うん」

「うーん・・・。あーちょっと待つて！」

そう言つと叶佳<sup>きようか</sup>はなにかを探してこゐようだつた。

「あつたあ！」

「へ？」

「あのね・・・。『人間に自分がマーメイドだつてバレたらもう一度と陸にあがることも、海上にあがることすらできなくなる』だつてさ。マーメイド専門BOOKに書いてあるよ」

「えええええ？！」

「そんな・・・。

じゃあ二度と裕樹ゆきに会えなくなるじやん・・・。

そんなのやだあ。

「え？ どうしたの？？ もしかして海李正体うみりばらす気じや・・・。」

「そ、そんなわけないじやん！！」

「だよねえ。よかつた」

「じゃあありがと」

「うん。バイバイ

ガチャッ

私は電話を切った。

はあ～・・・。

どうじょ・・・。

バレたら裕樹ゆきと会えなくなるし、言つたら裕樹ゆきに会えなくなるし・・・。

あ  
ん！  
誰か助けてえ

マー・メイドの姿で・・・

次の日、

私は学校に向かつた。

ガラッ

教室に入り、自分の席に座つた。

「おっす。海季<sup>うみり</sup>」

振り向くと、裕樹<sup>ゆうき</sup>がピースしていた。

ドッキン

私は顔を真つ赤にした。

「お・・・おはよ

「どした? 顔あけーぞ?」

そう言つて裕樹<sup>ゆうき</sup>は自分の額と私の額をくつつけた。

私の胸がドキドキしている。

近づけるな。バカあ!

「熱はねーみたいだな」

そう言いながら自分の額と私の額を離した。

・・・あー。ドキドキしたわ。

「なあなあ、今田さぼりねー?」

「え?..!」

ぐ、ぐほひつて・・・。

「そんなの悪いことじやん!」

「こーんだよッ。それとも海季うみこって真面まめ子こちゃんなんのか?..」

「ち・・・ちがつよ!..!」

「じゃあ行いばり!」

グイッ

急に裕樹ゆきは私の腕を引っ張った。

そしてそのまま教室を出て、学校も出た。

「ど・・・ど!」行く?..!

「こーから着きこ!」

私達は何分間か走りつけた。

「着いたぞ……！」

「え？！」

そこは私達が出会った海だった。

「朝もきれーだな」

「海はいつも綺麗だよ」

私は海を見つめた。

・・・ホント綺麗。  
みんな、元気かな。

「なあ 海李うみり」

「ン？」

「俺達・・・」で出会ったよな

「そりだね」

つてか！

裕樹ゆうき何当たり前のことを真剣な顔で言つてんの？！

・・・変なの。

「俺さ、子供の頃さ、子供の人魚みたんだ」

「え？！」

「なんか綺麗なうろこしてた・・・」

私じゃないよね。

私・・・口来たことないし・・・。

「もう一回会いてーなって思つていつも口口にいるんだ

「こつも・・・？」

「ああ。朝も昼も夜もいるぜ」

そんなに・・・。

その人魚は愛されてるんだな・・・。

うらやましい。

そして学校が終わり、私達もそれぞれ家に帰った。

夜、

ベランダに出ると、砂浜に<sup>ゆづき</sup>裕樹<sup>ゆうじゅ</sup>がいた。

ホントに待ってるんだなあ・・・。

よしー！

私は<sup>ゆづき</sup>裕樹<sup>ゆうじゅ</sup>に見つからないように砂浜に向かい、海に飛び込んだ。

そしてみると私はマーメイドの姿になつた。

私は水中から飛びはねた。

バッシャンッ

・・・ 裕樹にバレるよつた。

ゆうき

「あー。」

裕樹は気づいた。

「お前はあの時の・・・」

・・・え？ 私？！

「」の「」の色・・・。その髪型・・・。やっぱりお前だ  
「どうして」の「」の？

「お前に会いたくて・・・ずっと待ってたんだ！」

私はニコニと笑った。

「私も会いたかった。会えて嬉しい。」

私は昔会った記憶も無いくせに話をあわせた。

「じゃあ。またね。」

「あー。」

バッシャンッ

私は水中に潜った。

「あいつ・・・、誰かに似てる・・・」

これでいい。

私も満足

でも・・・私、  
裕樹に会ったことないのに・・・。  
どうして裕樹は知ってるの？

## 告白と涙の別れ

「フルフルフル

私はまた誰かに電話をかけた。

「もしもし？」

「あ。もしもしあ母様？」

「あら海李。<sup>うみり</sup>どうしたの？」

私はお母様に電話をかけたのだ。

「子供の頃私・・・陸の近くに行つたことがある？」

「あるわよ。波に流されて・・・もうお母さん達探し回つたのよ

「そなんだ・・・。ありがとーじゃね

「バイバイ

ガチャツ

私は電話を切つた。

私・・・1回会つたんだ・・・。

「ピーンポーン

家のチャイムが鳴った

ガチャツ

「はい？」

ドアを開けるとそこには裕樹<sup>ゆうき</sup>が立っていた。

「よお」

「何？」

「つめてーな。ちょっと歩かね？」

「いいけど・・・」

私達はまた海に向かった。

ザザーン

波の音が聞こえる。

懐かしい音・・・。

「海李<sup>うみり</sup>・・・」

「ン?」「

「昨日マーメイドに会つたんだ」

「え?..」

それは私だった。

「昔にあつた奴と一緒にだつたんだ」

「それっていいことじやん?」

「おお。そーなんだけど・・・」

裕樹は下を向きながら話し始めた。

「なんかさ・・・俺そいつとまちがう世界にいるよつた気がして・・・」

「・

・・・ちがう世界。」

「だつてさ、俺は人間でアイツは人魚。俺は陸にいてアイツは海。  
ちがうとこに住んでいて種類も違う・・・」

「裕樹は・・・」

「ン?」

「そのマーメイドのこと好きなの・・・?」

裕樹は少し黙り込み、口を開いた。

「好き・・・」

ズキッ

私の心が痛んだ。

「『メン・・・帰るね』

私は走り出した。

「海季<sup>うみじ</sup>！…！」

バタンシ

私は家のドアをおもいつきり閉じた。

「…・・やだよ」

私は目に涙を溜める。

「どうしてなの・・・?・どうして・・・」

私の目から涙が溢れ出した。

「どうして<sup>ゆうき</sup>裕樹の好きな人が私の人魚の姿なの?！」

私は泣きながら叫んだ。

「…・・どうして人間の私じゃないの?！」

私は人魚だけど、人間の私を見てよ・・・。

私はその日、泣きながら眠りについた。

次の日、

私が学校に行くために家から出て学校に向かった。

「よ・・・よひ」

裕樹<sup>ゆうき</sup>が声をかけた。

「…明るく笑顔で話さなきやー。  
裕樹<sup>ゆうき</sup>に罪悪感が…。」

「おはよ。裕樹<sup>ゆうき</sup>！あれ？どうしたの？なんか暗いねえ？？一日の始まりは朝だぞー？？」

私は苦笑いをしながら明るくふるまつた。

「…・・・やうだな」

教室に入った。

筆箱を見るとシャーペンに芯<sup>あい</sup>が入ってなかつた。

「ゆうきー！」

私は裕樹<sup>ゆうき</sup>の肩をトンッと叩いた。

「どしたんだよ」「シャー芯ない？」

「あるぜ」

裕樹はそう言いながらシャー芯を出した。

「はいよ」

私の手にシャー芯を乗せた。

「あ、ありがと」

私は笑顔で自分の席に戻った。

ガタンッ

裕樹<sup>ゆうき</sup>が大きな音を立てて立ち上<sup>あ</sup>がつた。

「ちよっと來い」

裕樹<sup>ゆうき</sup>は私の腕を掴み、トイレの前へと連れて行つた。

「お前や、何無理してんだよ・・・?」

「え? な・・・なんのこと? ??」

「とほけんな! !俺には分かるんだよ」

「・・・」

「なんですよ・・・」

「え?」

「なんで分かっちゃうのよ! ! わざわざと照るくしてたのに・・・。」

裕<sup>ゆ</sup>

樹の前では明るくしてたのに……分かつたら意味ないじゃない

私はまた涙を流していた。

「なんでそんなに強がんだよ……」

「だつて……」

「だつて裕樹ゆうきが私のマーメイド姿に恋するからでしょ？！」

「え？！」

「おま……人魚だつたのか……」

ハツ

私……言つちやつた……！

『人間に自分がマーメイドだとバレたら、陸にあがることすら、海上にあがることさえ出来なくなる

』

「私は……」

「私は裕樹ゆうきのこと人間の姿で好きなのに……」

「え」

そう言つたとき、裕樹ゆうきは私をギュッと抱きしめた。

「俺が・・・人魚のお前が好きってことは・・・」

「人間のお前も好きだってことだ」

「ゆう・・・き」

「好きだよ」

「ありがとお

私は涙が溢れて溢れてしかたがなかつた。

「うみり  
海季！-！」

誰かが私を呼ぶ。

「お・・・お母様？！」

そこには人間の姿のお母様がいた。

「な、なんで・・・」

「あんた！正体ばらしたね！-！」

「・・・」

「もう・・・帰るよ

お母様が強引に私の腕を引っ張った。

「痛いよお母様！！」

バツ

その時、お母様が私の腕を掴んでいた手を無理やり放した。

「な・・・・！？」

「お母さん！海季うみりが痛がつてるじゃないですか！！」

「・・・」

「でもこれは決まりなんだよ」

「え？！」

「人間にマーメイドだってバレたらもう『ココ』には来れないんだよ」

「・・・嘘だろ」

「嘘じやないよ！－」

私が口をはさんだ。

「じゃあ海季うみりは分かつてて言つたのか？！」

私は静かにうなずいた。

「なんでだよ……会えなくなるのに……」

「言わなきやー言わなきや 裕樹は分かんなかつたでしょ？」

「・・・」

「だから言つたの……でも悔いはない……もうこの。帰るわ裕樹。元氣でね」

私が歩き出した瞬間、

グイッ

裕樹が私の腕を引っ張り、自分の唇と私の唇を重ねた。

「んッ？！」

裕樹は私の唇を離した。

「じゃな……。海李」

裕樹をフシヒ見ると、涙を流していた。

「ゅう・・・や」

「行くよ。海李」

私は無理やりお母様に引っ張られた。

「<sup>ゆうき</sup>裕樹……愛しててる……！……また会おうね  
」

私は大声で叫び、ピースした。

<sup>ゆうき</sup>裕樹もピースしてくれた。

・・・バイバイ<sup>ゆうき</sup>裕樹。

好きだよ・・・。<sup>ゆうき</sup>裕樹。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3319d/>

---

私の正体<sup>°</sup> マーメイド<sup>°</sup> <sup>\*</sup>

2010年10月11日14時26分発行